

## 1 工程@1円～知的障害者の労働現場

### 22: におい

千葉 晃央

#### 1960年代、アメリカ

「北部中央のM州にある施設NO.1の建物に入ってみると、長さ20ヤード(約18.3メートル)、幅10ヤード(約9.1メートル)くらいのウイングからなる巨大なL字型のデイルームを職員がガラス越しに監視できるようになっていた。(中略)このデイルームには玩具が一つもなかった。何人かの子どもたちは頭をテーブルにつけており、他の子どもたちは壁際の床にうずくまり、あるいはあろうことか、一番暗い片隅にうずくまっていた。ここはこの建物にある重度の知的障害児のための唯一のデイルームであった。その隣の部屋から彼らのベッドルームで87床隙間なく置かれていた。10人くらいの子もたちがベッドに横になり、手と口のまわりを排泄物で汚していた。この子どもたちの世話をしているのはたった一人で、しかも16歳くらいの知的障害を持つ少女であった」

障害を持つ方々の生活をよりノーマルな生活にする、障害者をノーマルにするのではなく、社会をノーマルにするという「ノ

ーマライゼーション」という考え方がある。今では社会福祉の原理の一つとされるが、この考え方を発展させ、世界に広めたのがニリエといわれている。冒頭の文章は彼が1960年代にアメリカの知的障害者施設を訪れた時の報告である(ベクト・ニリエ著 河東田博・橋本由紀子・杉田穂子訳編『ノーマライゼーションの原理—普遍化と社会変革を求めて』現代書館、1998)。この約20年後にアメリカの知的障害者施設を訪れた方にも同じような体験をしたことをきいている。

#### 鍵と格子

福祉施設は、常に「におい」と共に語られてきた。施設を訪れたときの「におい」。アンモニア臭は排泄物等が原因によるものと思われる。それが福祉施設の特有のにおいになっていることも多かった。

昔のある場面を思い出すと一緒に「におい」も甦ることも多い。私が初めて訪れた福祉施設の「におい」は今も忘れない。学生の頃、重度の方が多く入所している知的障害者福祉施設にボランティアにいった。

時代は1990年代。その施設では、居室に入るのにも鍵を開け、外に面している窓には格子がはめられていた。私がこの連載で取り上げている「就労」を目的にした施設とは異なり、「生活」を目的にした、より障害の重い方が利用する入所施設だった。

現在、私は国家資格社会福祉士の養成等の業務にも携わっている。その業務の中で高齢者施設、障害者施設、児童福祉施設、生活困窮者支援施設…等、福祉施設には年間に複数個所、お邪魔する。年に複数か所新しい福祉施設にも訪れている。しかし、こうした「におい」を感じることはほぼないといっている。世間では、時折、福祉施設やその職員による不適切な処遇がニュースになっている。しかし、確実に全体としての福祉や支援の内容はよくなっているというのが現在の実感である（もちろん十分ではないし、徐々にではあるともいえる）。ただ、においに関して、仕事をする施設では仕事で扱っているモノのにおいだけはあ

### 体に染みつ়く仕事のにおい

私が働くような福祉的就労の施設では、どんな作業をしているかによって、その施設のにおいがある。金属製品の作業をしているところは、油のにおいがする。服に油がついたり、手の爪に油汚れが入り込んだりする。職員も、利用者さんも同様である。油汚れがよく落ちる特別な手洗い石鹸もあり、活用されている。お線香を扱っている施設では、線香のにおいがする。リサイク

ルの仕事をしているところは、その扱っているもののおいがする。そのにおいが作業着や体に染みつ়くことも多い。私は仕事の後、清拭等をおこない、仕事帰りに研修等に出かけることも多い。そこでは、まだ「においがついているよ!」と言われたことも過去にあった。そのぐらい染みつ়くのである。

そのようなにおいを放置しているわけではない。換気はもちろん、オゾン消臭器、空気清浄器が設置されているところもある。カテキン入りの消臭剤も完備し、作業で使う設備自体にその噴霧器を完備しているところもある。エアコンプレッサーを使った作業着へのエアの吹き付けもしてきた。エアシャワーまではいかなくとも、「におい」の元を少しでも減らそうという努力である。それでも施設見学に来た人が作業場に入ると同時に鼻をつまむことがある。



↑エアシャワー

人間が「におい」を感じる仕組みは、鼻の粘膜に「におい」のもとになる分子が付

着して「におい」を感じるという。それを知ってしまうとマスクはやはり欠かせないようにも感じられる。もちろんリサイクルに関する仕事ではマスクをする。

アルミ缶のリサイクル等、飲食物の容器を扱うリサイクルの現場では、さまざまな飲料や食品の混ざった「におい」がある。にたようなにおいは私は阪神淡路大震災で被災した時に感じたことがあった。冷蔵庫や食糧庫ではガラス容器が破損し、いろいろな飲料、食料が散らばり混ざり合った。そのときでも十分な「におい」だった。それプラス腐敗臭がリサイクルのにおいのように思う。また食品に関する仕事でも、もちろん衛生的に作業を行うためマスクを着用する。真夏もちろん季節を問わずである。



### 誰かがしているという想像力

先にも触れたように施設見学者から「におい」に関して対処をした方がよいと指摘を受けることもある。もちろん最大限は対処をおこなう。ただ、作業をする際に一定の「におい」は残ってしまうこともある。そのため、一方である程度は「こういう環境で物を作ったり、リサイクルをしていたりするのが現実であること」、「こうして社会が現在成り立った上で、あなたも生活しています！」ということを知ってください！と対応してきた。病院で働けば薬の「におい」がつくこともあるし、プールで働けば塩素の「におい」がつくし、農作業をして働けば土の「におい」や肥料の「におい」がつくのと同様である。障害者であろうと健常者であろうと、ある程度は同じである。

知的障害者の方の場合は、もし困っていることがあってもそのことを周りにいる人に伝えることが苦手である。その点は、われわれが配慮しなくてはならない。声もかけるし、観察の中で汚れの発見や動作などの視覚的情報から不適切な状況がないか確認を常に繰り返している。

### 五感をフル活用！

作業で使う機械の調子に関しても、摩擦による焦げ臭さ、火災等の災害に結びつくような異臭がしないか？等は、常に注意を払っている。企業が我々のような仕事をする福祉施設（事業所）と取引する時、商品の在庫置き場的機能を含めて、パートナー

シップを持つこともある。倉庫料、在庫管理代として、お金をいただいていたことも実際ある。取引先でも「〇〇倉庫」という取引先も多い。こういった会社は置き場、物流の拠点として利用してもらいながら、置いておくだけでなく、声をかけてもらうと組み立てますよ、袋入れもしますよ、検品作業もしますよ、という形で現在に至っていることが多い。そのため、直接パートさんを雇ったり、家庭での内職方式を採用したりしている。そういった業者さんから、お仕事をいただくことも多かった。封筒セット、景品の袋入れ、カレンダーセット、エコバック検品…。当然その在庫のにおいもつきものである。インクのにおい、紙のにおい。ほこり…。

### 「いいにおい！おなかすいたね～」

お昼になると厨房からお昼ごはんの「におい」がしてくるのも日々の楽しみである。厨房がある、台所がある施設では調理時のにおいや調理の時の音も毎日の大事な「彩り」である。「おなかすいたね」「おいしそうなおい！今日のごはんなんだっけ？朝は何食べたん？」「昨日の晩もカレーやったあ～！」など、自然と会話が始まる。こうした何気ない日常の共有が信頼関係の構築をもたらしてくれる。

福祉領域では、社会福祉法人に限らず、民間事業体、NPOが運営する福祉事業所がすっかり当たり前になった。これら後発の施設では、お弁当を外部のお弁当屋から買っていることもある（前々回の連載「食べる」でも触れた）。他にも現場の職員が施設

の日中プログラムの一環として利用者さんと自分たちの昼食を一緒に調理することを設定しているところもある。調理をすることがリハビリテーション機能、能力開発的機能がある。においなどを五感で感じるものがそういった機能を可能にさせている側面があることは想像に難くない。

### 「めっちゃ汗かいたで。頑張ったわ」

汗の「におい」。作業での汗は働いた証。仕事の際に着ている服も、しばらくすると汗のにおいが染みつく。その時には洗濯しても取れないので処分をする、というのが働く職員にとっての日常である。支援の場面でも洗濯ができていますか？おトイレ関係のケアは大丈夫か？など、においが支援で大事な時も多い。

雨の「におい」。雨の時は様々な心配をする。例えば、朝の豪雨。そんな中、うまく通園途上で、交通機関が混乱する中で施設に辿り着けなかった人をお迎えに行くこともある。登園時には靴下、カバン、服が濡れていないかな？…、濡れていたら、洗濯や干して乾かす、時には乾燥機も使っている。乾かしたものを忘れないようにもしなくてはならない。靴下は濡れていても言わない方、言えない方もおられる。そのため雨の時は確認もしている。

また、雨が降ると野球を愛する人たちがざわざわする。それはシーズン中でペナントレースの終盤では特にである。自分のひいきの球団の試合がないのでは？と試合があるか？ないか？そのことを気にされる。

「雨は降りません！」と繰り返す方もおられる。雨による予定変更の場面から、予定の変更は苦手という知的障害（特に自閉症）の方の特徴を感じられることもある。

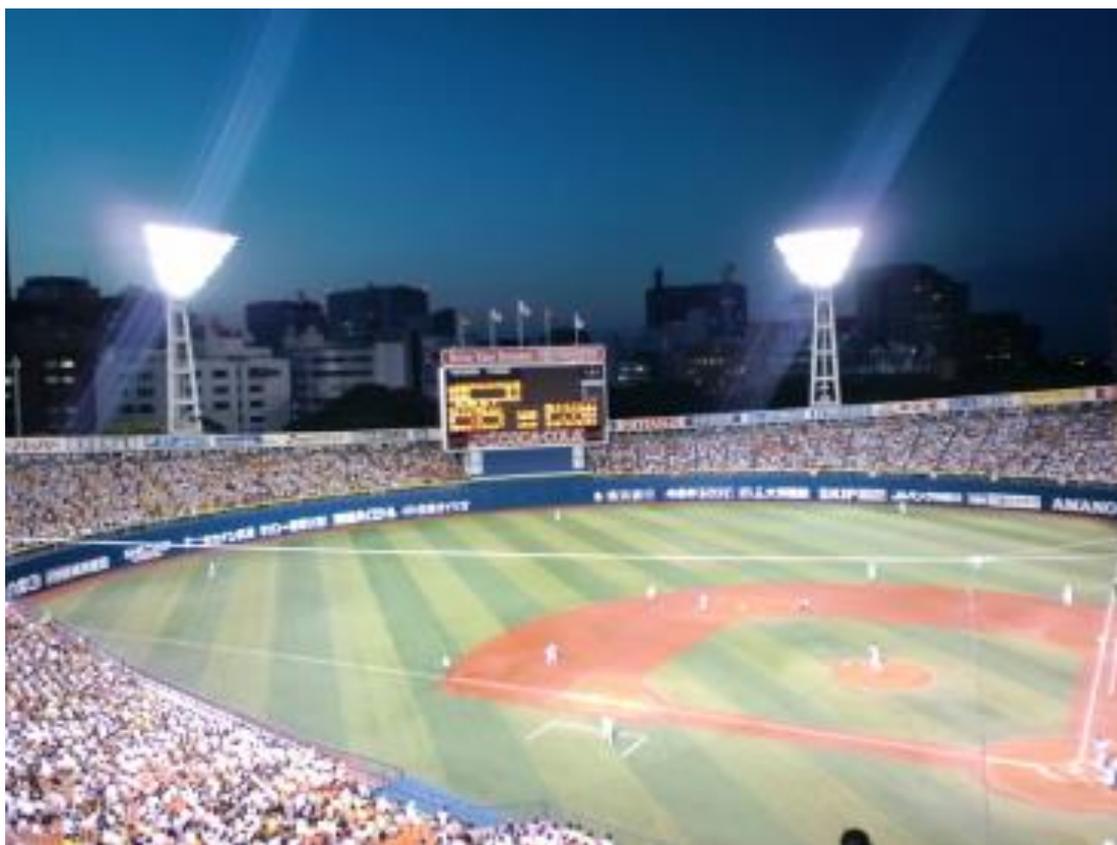
### 雨のにおい

帰りに雨が降る。雨合羽や傘の用意が必要になってくる。傘を忘れた人が使えるよう施設が所有する傘の貸し出しも行っている。場合によっては悪天候のため、帰宅できないないように、はやめの帰宅ができるよう一日のプログラムを切り上げる判断をする時もある。状況によっては最寄りの駅、バス停、あるいは自宅まで、車で送ることもある。こうした場合、帰りに迎え

に来ているご家族、他の支援スタッフとの連絡も必要になる。自転車で来られている方は、公共交通機関の利用に変更をするよう提案する。その提案で変更されることもあるし、変更を望まずに雨合羽で帰ろうとされ、小降りになってから出発するよう働きかけることもある。

### 「音」「空気の流れ」「光り」

住居や建物を作る時、事前にシュミレーションをしても、なかなか実際にはわからないこと、つまり建ってから、やっとわかることとして、「音」、「ひかり」、「空気の流れ」ときいたことがある。数年前、施設の改築工事に関わった時には、このこと



に随分苦慮した。「わからない」ながらも、空気の流れ、つまり「におい」を含めて考え、対策を立てた。それでもやはり「できからわかること」の3つに関しては、「そうだなあ」と思う点がある。だからこそ、日々の中で発見し、対処をしていくことが大事な要素だろう。

…今日も勤務が終わった。秋雨前線の影響から、今日も雨が降った。「巨人戦が中止やし、その間にタイガースが勝たしてもらいます!」「中止にならへんわ!巨人が勝ちます!」「雨降るで!」「降らへんわ!」…ある意味平和でにぎやかな日でした。

(写真:橋本総子)

## BACK ISSUES

- 作業着 21 2015年6月
- 食べる 20 2015年4月
- 通勤 19 2014年12月
- クスリの作用、人の作用 18 2014年9月
- 倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月
- 触れる 16 2014年3月
- 対談企画「教育と福祉の連携を模索する」 2014年3月
- 情報の格差 15 2013年12月
- 20年前のノートから 14 2013年9月
- そうじのねらい 13 2013年6月
- 個別化の暗部 12 2013年3月
- グループワークの視点 11 2012年12月
- 実習生がやってきた! 10 2012年9月
- 月曜日のせいやな 9 2012年6月
- 所得を決める福祉職? 8 2012年3月
- 世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月
- この現場へのたどり着き方 6 2011年9月
- 障害を持つ友達と過ごすとは? 巻末座談会  
2011年9月
- 旅行がない! 5 2011年6月
- 職員の脳内回路 4 2011年3月
- たかがガムテープ、されどガムテープ 3  
2010年12月
- 利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月
- 障害者自立支援法で不景気に!? 1 2010年6月